

隆寛の思想形成

善 裕 昭

平安末・鎌倉初期を代表する天台宗の学僧である顕真・慈円・静厳・証真・聖寛・明禪・公胤らは、法然の専修念仏に對して様々な姿勢をとった。隆寛も彼らと同じ天台宗の学僧として出発するが、法然との接触をもって『選択集』を相伝され、やがて独自の他力思想を展開していくことになる。小稿では山門僧としての隆寛の活動や思想状況を検討し、そこから他力思想へと思想形成していく過程を考察したい。

I

建久年間の隆寛といえは、『拾玉集』に収録する和歌から慈円との交流が指摘されてきた。しかしこれ以上に山門僧の活動として見逃せないのは、最勝講・法勝寺御八講に聴衆として出仕していることである。この点はこれまでの隆寛の專論において取りあげられたことがない。

最勝講 法勝寺御八講は、院最勝講とともに三講といわれ、延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺の四箇大寺の学僧が公請に

よつて出仕する論義法会である。最勝講は毎年五月に閑院内裏において、法勝寺御八講は毎年七月に法勝寺阿弥陀堂においてそれぞれ五日間、十座の問答がとり行われる。東大寺宗性の書写になる『最勝講問答記』『法勝寺御八講問答記』から証義・講師・聴衆（問者）として出仕した学僧を知ることができる（平岡定海『東大寺宗性上人之研究並史料』上、収録）。隆寛が登場するのは建久四年（一一九三）五月の最勝講からであり、初の聴衆としての出仕をはたしている。

第二日 朝座、（講師）信宗僧都 問者隆寛山

最勝講は『金光明最勝王經』を講讀するものであり、聴衆が問者を兼ねて講師と問答する。隆寛は第二日目の朝座に講師の信宗僧都（興福寺）と問答している。続いて建久五年五月に二度目、建久六年五月に三度目の聴衆として出仕し、この時の問答の相手は後に『浄土決疑抄』を著して『選択集』を批判することになる園城寺公胤である。また法勝寺御八講には建久五年七月に初の聴衆として出仕している。

このように最勝講・法勝寺御八講への出仕を計四回確認することができ、建久年間の隆寛の活動が新たに判明することになる。今後、彼の山門僧としての活動を見る場合、この点は是非とも重視していかなければならない。同じ法然門弟でも弁長・証空・幸西・親鸞・長西らがこのような論義法会に出仕することはなく、隆寛は彼らとは立場を異にしている。

ところで『最勝講問答記』『法勝寺御八講問答記』から毎年の諸学僧の出仕状況を追っていくと、まず聴衆を何度か勤め、次におおむね已講・僧綱位になつて講師を何度か勤め、さらに一部の者が証義へと進む過程があることがわかる（一概にはいえないが）。ところが隆寛は聴衆だけで終わつており、証義はおろか講師を勤めることが一度もない。

そこで慈円との関係からこの点を考えてみよう。隆寛は建久四年五月に初の最勝講聴衆になるが、この前、建久三年十一月に慈円は一度目の天台座主に補任されており、建久四年三月の座主補任による拝賀参内で隆寛は講堂導師の役で参列している（『門葉記』卷一七三・一八四）。そしてこれ以後、隆寛は最勝講・法勝寺御八講に登場してくるのである。さらに慈円の座主辞任は建久七年の政変にともなう建久七年十一月であるが、この前年の建久六年五月の最勝講を最後に隆寛の出仕がぱつたりと消えている。つまり隆寛の出仕は慈円の座主就任期間に限られているのである。そして建仁元年（一二〇

一）二月の慈円二度目の座主還補までの約五年間、山門僧として活動が諸史料にあらわれない。座主還補直後、三月に慈円が修した報恩講で供僧を勤めており（『門葉記』卷一三九）、再び山門僧としての活動が確認できるのである。

また隆寛の僧位僧官を考えてみよう。この建仁元年三月の慈円の報恩講に「隆寛已講」とみえ、これまでに已講となつているのが確認できる。延暦寺・園城寺の頭教系学僧の場合、北京三会（天台三会・天台二会）の講師を遂講して已講となり、次いで僧綱へ補任されていくことになる。ところが隆寛は実際には天台二会講師を勤めずして已講になっている。そして元久二年（一二〇五）二月に権律師となるが（宣旨は三月）、これも慈円が後鳥羽院のために法勝寺金堂で修した大熾盛光法の勲賞および二会の巡によるもので（『天台座主記』等）、慈円の采配で昇進をとげているのである。

このあたりの事実関係は別に検討したいが、最勝講・法勝寺御八講の聴衆としての出仕が慈円一度目の座主就任中に限られ、講師を勤めることはない。隆寛と同じ頃の天台学僧で法然とも何らかの関わりをもつ公胤・静厳・聖寛・明禅・宗源らと対比してみると、彼らはおおむね聴衆を経て講師となり、講師を何度か勤め証義にまでなっている。また宗源以外はいずれも天台二会講師を遂講しており（天台二会講師次第、東寺百合文書）、僧綱を昇っていく。

隆寛は結果的には権律師に補任されるが、天台学僧として論義法会での活動は必ずしも活発なものではない。最勝講等への出仕は、慈円の天台座主期間に限られていることから彼の背後の力を想定しておいてよいと思う。『門葉記』等においても、隆寛の活動が確認できるのは慈円が主催する法会に限られている。すなわち慈円との関係なしには山門僧としての活動はありえなかったのである。

II

隆寛が慈円時代から浄土教信仰をもっていたことは『拾玉集』収録の和歌や『明義進修集』などからうかがえるが、さらに慈円のもとで西方懺法を修していた。この点もあまり取りあげられないので簡単に述べておく。

かつて佐藤哲英氏は青蓮院蔵『西方懺悔法』を紹介し（作者不明、鎌倉期には円仁作とされた）、慈円がこの書を指南として西方懺法を修したことを解明された（『叡山浄土教の研究』）。隆寛はこの西方懺法に関与しているのである。慈円は二度目の座主就任中、建仁元年（一一〇一）九月に日吉社の大宮拝殿で法華五種行を始めるが、この一連の修法のなかで聖真子（本地弥陀）では西方懺法が行われた。良尋・仁慶・澄真（証真）・覚什・聖覚らとともに隆寛も供僧を勤めている（『門葉記』巻八十九、『慈鎮和尚伝』）。次いで座主を辞任して後、元久元年

（一一〇四）五月、慈円は吉水房で如法経供養を始めるが、これは法華懺法と西方懺法を行うものであった。忠快・豪円・禅隆らとともに隆寛も供僧を勤めている（『門葉記』巻八十二）。

さらに慈円は元久二年、後鳥羽院の御願として吉水の地に大懺法院を建立するが（三条白川から移転）、建永元年（一一二〇）起草の「大懺法院条々起請事」（『門葉記』巻九十一）によると、成円・円能・良雲・忠快・聖覚ら三十人の供僧が選定され隆寛も選ばれている。大懺法院では長日勤行として朝には法華懺法、夕には西方懺法が行われ、このほか毎月仏事・毎年仏事が定められている。このように隆寛が西方懺法に関与しているのが諸史料から確認できる。さらに『極楽浄土宗義』に「本朝慈覚大師云、浄土一宗」と『西方懺悔法』を引用しているのもそれを裏付けていよう。

西方懺法がどのような浄土思想であるかを見るには、その指南書である『西方懺悔法』を検討しなければならない。紙数の都合から簡単に述べておくと、七日間の唯坐唯立の修行であり人間の罪業を懺悔することと合わせて深刻である。善導の思想的影響も強く受けており、人間みずから意識的に懺悔を行い罪を減するところに特徴がある。

大懺法院は天下泰平の祈祷道場であり、特に保元の乱以来、怨霊が一天に満ち亡卒があふれているので、法華懺法・西方懺法を修して怨霊の罪を除滅し国家を安泰ならしめようとい

うところに主旨がある。隆寛はこのような思想状況にいた。西方懺法はいわば顕密の範疇にある浄土教であり、隆寛にとっては大懺法院の主導者慈円やスタッフ成円・円能・良雲・忠快・聖寛らと共通に懐くことができる浄土教信仰であつたのである。

III

慈円のもとで山門の仏事を勤仕しながら、法然との接触をもち元久元年に『選択集』を貸与されて書写する。それから四年後の承元二（一一〇八）～三年に『弥陀本願義』を著すが、ここに早くも『選択集』の影響が看取できる。『選択集』の書名をあげた引用こそないが、十八願解釈の箇所では『選択集』第三章を踏まえた表現が顕著であり、また西方浄土宗意の項では『選択集』一・二・十六章の影響が見られる。法然はまだ生存中であり、この段階で『選択集』ないし法然思想の影響のもとに著された著作はほかに見当たらない。したがって『弥陀本願義』は『選択集』の影響を受けた初の著作としての位置にある。

『弥陀本願義』の思想で注意すべきは、十八・十九・二十願の三願解釈である。四十八願に願名を付けて解釈することは新羅浄土教からはじまり、日本では智光『無量寿経論釈』、良源『極楽浄土九品往生義』、静照『四十八願釈』、真源『四

十八願釈』、澄憲『四十八願釈』などがあり、『弥陀本願義』はこの系列の史料である。しかし三願解釈が先行四十八願釈とは異質である。そして三願解釈をもとに廻向往生・廻心往生ということを主張している。「廻向」「廻心」に特殊な意味を込めることは早くから注目されてきたが（平井正成『隆寛律師の浄土教附遺文集』など）、十九願の機とは初め発菩提心などで成仏をめざし、後に「廻向」「廻心」して他力に帰依した者であり、この時点で十八願の機と同じになる。二十願の機は初め諸行往生または諸行・念仏兼修であり、後に他力に帰依して十八願の機と同じになる。十九・二十願の本願の意思は、成仏や諸行往生の人を他力へ転入させる点にあり、結果的に報土往生は念仏・信心往生しか認められない（ただし定善の扱いは要注意。また『弥陀本願義』と『具三心義』『極楽浄土宗義』では、後者は弥陀真实心説が確立しており三願解釈にも異なりはある）。

隆寛は門弟信瑞に次のように語っていた。

先師律師つねにの玉はく、隆寛こそ十九の願の機よ、其故は、本と円宗の菩提心を発して、聖道の出離を期せしほどに、末法に生をうけたる身、涯分をきる故に、聖道の出離の叶ふまじきいはれを心得て、浄土門に入るなり云云。（『広疑瑞決集』巻二）

初め発菩提心で成仏をめざしたが末法における人間の愚かさを自省して浄土門へ転入したのだと、自己の思想足跡を回顧

している。隆寛は最勝講等に出仕して延暦寺学僧として昇進の道を歩もうとするが、そこでの活動は必ずしも活発ではなかった。法然との接触をへて聖道門・自力の立場から脱却していき、他力論・善導義を深く探求して他力思想の展開を担う重要な人物となる。特異な三願解釈にこのような隆寛自身の思想足跡を読み取ることができよう。

もう一点ふれておくと懺悔観の転回である。西方懺法は人間の意識的な懺悔であつたが、隆寛は『極楽浄土宗義』で他力懺悔ということを中心に主張する。称名の功力は無量の罪を滅するから特別の懺悔は必要ない。善導が『往生礼讃』等で懺悔を勧めるのは、念仏に五十億劫・八十億劫の重罪を滅する願力の不思議、他力の不思議があり、これを信知させるために十悪・五逆・謗法等の悪行を列挙して「至心帰命阿弥陀仏」と結んでおり、これは他力によって衆罪を消滅するあり様を示したもので、これは通常の懺悔とは異なる他力懺悔なのだ、と。つまり懺悔は人間の力でなしうるものではなく、念仏・他力の側に懺悔の作用があり、念仏者に意識的な懺悔は必要としないのである。

西方懺法の指南書である『西方懺悔法』は善導の影響をも受け深刻な懺悔思想を展開しているが、隆寛は『極楽浄土宗義』で善導の懺悔を他力懺悔だと解釈する。この他力懺悔の思想は、西方懺法とは明らかに一線を画している。慈円時代

とは異なる浄土教思想に至っているのがうかがえよう。紙数の都合で十分に論証できず、隆寛独自の他力思想にあまりふれることができなかったが、詳細は別の機会にまわしたい。

〈キーワード〉 隆寛、最勝講、法勝寺御八講、西方懺法

（知恩院浄土宗学研究所研究員）

〔付記〕

校正中に『南都仏教』七十七号が刊行された。『法勝寺御八講問答記』特集が生まれ、問答内容に踏みこんだ研究がなされている。今後は問答箇所全体の翻刻が望まれる。また山崎慶輝「東大寺所蔵『法勝寺御八講問答記』の考察」（北畠典生教授還暦記念「日本の仏教と文化」）に御八講出仕者として隆寛の名があげられているのを知った。